

献辞

山本登朗先生はこの三月末日をもって定年を迎えられ、関西大学をご勇退される。二〇〇二年にお招きして目を見張る活躍をつづけられたが、はやくも一七年が過ぎ去ってしまったかとなんとも残念至極である。

山本先生は主著『伊勢物語 文体・主題・享受』（二〇〇一・笠間書院）をはじめとして、著書・編著書多数であり、いわゆる碩学・泰斗とされる大学者であることなど、いまさら言を俟たない（詳しくは「山本登朗教授 履歴と業績」をご参照いただきたい）。このようにすばらしいご業績の上に、学内の諸業務も嫌なお顔も見せず、スマートにこなされるのである。国語国文学専修代表、教職支援センター長、あるいは林原美術館と関西大学との連携事業の長などを、実は大変なご苦労をなさっているにも関わらず、汗一つお見せにならず業務を遂行された。前任校では附属高等学校の学校長までなさっておられたのであるから、恐れ入るばかりである。何をなさってもスマートにこなされるのが、山本先生の美学であろう。また、研究はじめ学内諸業務においてまで、常に一家の言を持せられ、我々のオピニオンリーダーであった。

一方そのご講義は、品格高いにもかかわらず熱意のこもったわかりやすいもので、非常に興味深く、学生・院生にもお慕いする者も多い。

多くの学生・院生・大学院修了者に囲まれておられる山本先生であるが、その大先生のご退職を皆々残念に受け止めている。しかし、ご退職とは人生の中で官仕えの労がなくなることであり、先生のご学問のためには喜ばしいともいえるだろう。自由のお立場となり、縦横にご研究に専念ください。さらなる研究のご発展をお祈りします。最後に山本登朗先生、今後ますますご壮健で、更にこれからも後進をお導きください。そしてご多幸を祈り上げます。